

風疹に注意しましょう

保健管理センター 管理医 松本 晃裕

ほけせん便り 124号

平成24年 9月 4日発行

風疹(rubella)は、発熱、発疹、リンパ節の腫れが生じるウイルス性疾患です。我が国では約10年ごとに大流行がみられていましたが、今年は大流行しています。特に20代から40代の男性患者が多く発生しています。季節的には春から初夏にかけて患者数が最も多く発生しますが、秋から冬にかけての発生もありますので、これからの季節も注意が必要です。

上気道粘膜より排泄されるウイルスが咳やくしゃみで飛沫感染を生じ、14～21日の潜伏期間の後、発熱、発疹、リンパ節の腫れが生じます。発疹は顔から、頭部、体幹、四肢へと広がりますが、通常紅く、小さく、やや隆起しているのが特徴です。リンパ節は発疹が生じる数日前より腫れはじめ、3～6週間位腫れた状態が続きます。鼻水などの症状も出ます。ウイルスの排泄期間は発疹出現前数日から、出現後約1週間です。

風疹の症状は子供では比較的軽い場合が多いのですが、時に急性脳炎や血小板減少性紫斑病(2,000人から5,000人に1人程度)などの合併症が出現することもごく稀にあるので、注意が必要です。

学校保健法で定められているように、風疹に感染していると診断されたらすぐに大学に来るのを休み、全身の発疹が消失するまで出席停止となっていますので、診てもらう医師が出席可能と判断するまで学校を休んでください。

妊娠前半期の妊婦が風疹に感染すると、胎児もウイルスに感染し、**先天性風疹症候群(congenital rubella syndrome)**となる場合もあります。年間での先天性風疹症候群の出生数は全国で5～10人程度の年が多いのですが、1976年、1977年、1987年は100人前後と発生数が多い年もありました。症状としては、動脈管開存症、肺動脈狭窄症などの先天性心疾患、難聴、緑内障、白内障、網膜症などの先天性異常があります。さらに新生児期に低出生体重、血小板減少性紫斑病、髄膜脳炎などにもなりえます。

この先天性風疹症候群を予防するために、妊娠可能年齢およびそれ以前の女性に対するワクチン対策が重要です。1995年以前は中学生の女子のみにワクチン接種をしていましたが、1995年からは男女とも生後12カ月～90カ月に第1回の接種を、さらに中学生で第2回の接種をすることとなりました。

風疹にまだ罹っていない方の感染予防には、ワクチン未接種者、および既に接種した者でも抗体価が低い場合は、ワクチン接種が必要です。

参考； 国立感染症研究所HP

<http://www.nih.go.jp/niid/ja/rubellaqa.html>